

日本統計学会会報

NO.115 / 2003. 4.30

発行——日本統計学会

東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所内
〒106-8569 Tel. 03-3442-5801 Fax 03-3442-5324

編集責任—国友直人（理事長）／藤澤洋徳（庶務理事）
山口和範（広報理事）／宿久 洋（広報理事）

振替口座—00190-2-61361

銀行口座—みずほ銀行広尾支店普通1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 会長就任のご挨拶	藤越康祝	1
2. 会長退任挨拶	杉山高一	3
3. 研究報告の募集		4
4. チュートリアルセミナーと市民講演会		6
5. 保育室設置のお知らせ		7
6. 「第8回日本統計学会賞」受賞候補者の推薦募集		7
7. 奥野忠一先生を悼む	吉村 功	8
8. 工藤昭夫先生を偲んで	坂田年男	10
9. 統計教育部会（分科会）のご案内		11

10. シリーズ：統計学の現状と今後 魅力ある商品創りに向けたこれからの品質経営	天坂格郎	12
11. 統計教育委員会からのお知らせ		15
12. 2002・2003年度評議員会議事録抄録		16
13. 2002・2003年度庶務会議事録		19
14. 公募情報		20
15. 会合案内		22
16. 修士論文・博士論文の紹介		23
17. 事務局から		24

1 会長就任のご挨拶

藤越康祝（日本統計学会会長）

このたび、評議員会での選出、並びに会員の信任投票を経て日本統計学会の会長に選ばれ、大変光栄に思っています。また、一方、21世紀を迎え学会として新たな対応が望まれている重要な時期に、伝統のあるこの学会を統括していかなければならない立場になり、その責任の重大さを痛感しています。甚だ微力ですが、理事長、理事会のメンバー、評議員の方々とともに、現在置かれている立場を十分に認識しながら、会員一人一人にとって魅力のある学会にするためにベストを尽くしたいと思います。

本学会の目的は、会則によりますと、統計学の研究及び普及を促進し、その発達に貢献することです。統計学はデータから有用な情報を抽出するための方法論として、種々の分野に適応され発展していますが、その研究には、データによる現象解明を体系的に行うための基礎的なものから、その方法を基礎にして当該分野へ本質的に貢

献するものまであります。最近、研究集会、雑誌、会報などにおいて、統計学の今後の方向が活発に議論されています。これらのなかで、とくに注目すべきこととして、



ゲノム、金融工学、環境問題、ニューラルネットなどの分野において、統計学の立場から取り組むべき新しい研究課題が台頭していることが挙げられます。本学会では、このように取り組むべき新しい研究課題や分野が生じたとき、これらの研究活動を促進するための方策として研究分科会が創設されたところですが、この充実に加え、新たな方策を模索することも重要な検討課題と思っています。また、学会のあり方に関連して、統計学関連学会の協調や連合の問題にも、先を見据えた検討が必要になっています。この問題は、10年前に

吉村会員が学会活動委員会主査として提案され、ここ3年間は学術会議会員・統計研連委員長として主に統計研連において検討されてきました。最近、統計学がおかれている環境や時代の潮流と相俟って、統計学関連学会連絡委員会が発足し、ご承知のように昨年度合同で大会が実施され、本年度も実施されることになっています。大会を合同で開催することに関しては、統計学会としてのメリットも多く、また、事務的・技術的な困難も少ないということで、理事会では合同大会を定着させる方向で検討しています。この他にも、英文誌の共同発行はできないか、さらに、一つの大きな連合学会にできなかつたという問題がありますが、これらは学会の存在意義にも係わる重要な問題ですので、皆さんの意見を伺いながら慎重に検討したいと思っています。

私事で恐縮ですが、92・93年度統計学会の理事長として、2年間通常の事業に加え、学会誌和文号の創設、統計学賞の創設、会費の値上げと会員への還元などについて検討しました。また、98・99年度学会活動特別委員会の主査として、学会を活性化させるための方策として、研究分科会として発足している常設研究部会の創設、国際化の促進の具体策などについて検討しました。今、これらのことについても、さらに充実・発展させる問題が持ち上がっています。研究分科会に関することは既に触れましたが、和文誌に関しては、年1回の出版を年2回にすることが検討されています。統計学の研究の深化と広がりにより、サーベイ論文が貴重になっていますが、年2回の発行により、多くの分野のサーベイ論文を比較的に早く見ることができ、研究・教育にも大いに役立つと思われます。これには、予算の問題が関係してきますが、現行の予算のなかで実現することを検討しています。英文誌を含め雑誌は学会の看板でありますので、充実に努め、国際的評価に堪えうるようになればと願っています。学会賞には、96年度から選考が始まった日本統計学会賞と、87年度に始まり01年度から日本統計学会が行うことになった日本統計学会小川研究奨励賞があります。昨

年度の評議員会において、これらの賞を補うものとして最優秀論文賞を創設することが提案されています。現在、この賞を出来るだけ早く実現すべくその具体案を理事会で検討しています。

統計学の研究・教育の在り方については、これまで大会、会報などにおいて何度か取り上げられてきました。また、とくに統計教育については、本学会の統計教育委員会あるいは発足したばかりの統計教育研究分科会において、その発展・普及に向けて継続的に活動されています。しかし、わが国の大学に特有のことでもあります。統計学に関する独立した学科・専攻が統計数理研究所に大学院博士課程後期がある他は、現在若干の進展がみられるものの、なお皆無に近い状態であるという問題点があります。独立した学科・専攻を設立する必要性は、83年に学術会議から出された勧告、90年に学術会議統計研連から出された報告などに詳しく述べられています。私事になりますが、広島大学において、このような勧告や報告、あるいは大学としての改革構想の度に、塩谷教授、正法地教授等と、独立学科・専攻の設立に努力しましたが、残念ながら実現するに至っていません。最近、東京理科大学、中央大学などで関係者のご努力が実りつつあることは、将来へ向けて明るい兆しであります。専攻の設立に関してはいろいろな障害がありますが、大学の法人化により若干解消されることが期待されます。しかし、一方、日頃から統計学の研究の価値を社会に説明し、統計学への理解を深める努力を続けることも重要で、これについて学会としてもより一層の取り組みをしたいと思います。

皆様からの、ご提案、ご意見、ご忠告を切望しますとともに、ご支援、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

会長略歴：

藤越康祝（ふじこし やすのり）、1942年生まれ
1964年 広島大学理学数学科卒業
1966年 広島大学大学院理学研究科数学専攻修士課程修了
1966年 広島大学理学部助手、1970年理学博士

1971年 神戸大学教養部講師，助教授
1978年 広島大学工学部教授
1982年 広島大学理学部教授，現在は広島大学大
学院理学研究科教授

研究分野：

多変量解析の理論と応用，統計分布の漸近近似
と誤差評価，経時データの解析，情報基準量によ
る次元縮小問題，学術雑誌；AISM, AS,
Biometrika, JASA, JMVA, JSPI, Sankhyaなどに論文
がある。

2 会長退任のご挨拶

杉山高一（中央大学）

2001年，2002年の2年間の会長の任期を，小西理事長，国友新理事長をはじめ理事，幹事，評議員，会員の皆様のお蔭で無事に果たすことができました。日本統計学会会報107号（2001年3月10日発行），会長就任講演論文（Vol.31, No.3）に書きましたが，その9割程が達成できたように思います。一緒に仕事をした理事長，理事，幹事の方々とは働き盛りで，大学あるいは研究所でもいろいろ重要な仕事を引き受けています。それぞれの方々が多忙の中を，日本統計学会の運営のために，誠心誠意尽くしてくださいました。有能で人柄の良い方々と仕事できたことは私にとってたいへん幸運なことでした。上述で9割方達成できたと述べましたが，これらのことは理事長はじめ理事，幹事の方々で成し遂げて下さったことであり，また評議員，会員の方々の理解と協力があつたからできたことです。ここに改めて皆様方に深く感謝申し上げますと共に，それについて報告をいたします。

日本統計学会の分科会規程が認められました。これにより統計学会の諸分野で活躍する会員が会員以外の方々と協力して，学会の中で活発に研究活動をするシステムができました。研究分科会がe-journal等を発行したとき，論文を世界中からアクセスできるJ-STAGE（科学技術事業団）にも登録できる方向で話し合いました。まずは評議員会で3つの研究分科会（統計教育，計量経済・計量ファイナンス，統計シミュレーション）が承認され活動を始めています。今後も数多くの研究分科会ができることを願っています。

統計学会の国際化は竹内会長，美添理事長のときに検討が始められ，1999年，2000年の理事会では国際関係担当理事をおき，具体的に動き出しました。学会間の結びつきは，日本に最も近い距離にある韓国を選び，交流を試みました。2001年にはI.S.I.大会を含めて私はソウルに3回，竹村理事も2回訪問し，また韓国統計学会会長を日本に招き討議しました。それぞれの国の大会に参加して研究発表をすること，お互いの学会誌を販売すること等をすでに始めています。2002年度の大会では台湾も参加して2つの国のセッションを設けましたが，これは今後ほかの国々と交流を進めていく際の一つのモデルケースになると思っています。

学会のIT化は時代の流れです。大容量のハードディスクを備えた性能のよいサーバを学会事務室に入れました。統計学会のホームページの充実，関連組織とのリンク，会員同志の連絡，意見交換のためのjssメールの実現等が進みました。「統計OR活用事典（東京書籍）」等の絶版になった書籍が会員によって電子化されて，「統計科学のための電子図書システム」として公開されていますが，それらを統計学会のホームページから見ることができるようになりました。会員にとってメリットのあるIT化は今後もさらに進むものと思います。

統計学会欧文誌をどうすれば国際的に知名度のあるjournalにできるかということは，3期前の山本拓理事長の頃からの課題でした。小西理事長が中心になりいろいろと検討した結果，オランダKluwer社の日本代理店であるSciPress社から出版

することを決めました。SciPress社は2000年以降の日本統計学会誌の論文の電子ジャーナル化をし、また国際的な販売を進めています。次の段階として、学会誌がサイテーションの対象ジャーナルになるように、学会としての努力を積極的に行う時期に来ています。

統計関連学会の協調は、学会の中で長い間議論されてきました。1996年9月に千葉大学主催で、幕張メッセにおいて統計学会と行動計量学会の合同大会が行われましたが、1度限りでその後は継続されませんでした。いろいろな方々の御努力により、2002年度大会は9月に明星大学で応用統計学会、日本計量生物学会と共催で行いました。2003年度の名古屋大会も同じく共催が決まっています。また、行動計量学会は同じ時期に同じ名城大学で大会を行います。この協力関係は将来の日本の統計学の発展に大きく寄与するものと期待されています。また、学会誌での協力関係も模索されています。今後も協力関係が継続していくためには、それぞれの学会の学会員にとって、大会の共同開催がどのようなメリット、デメリットがあったか、また将来どのようにそれらがもたらされるかの正確な分析・検討が常に行われて、学会の中で討議されることが重要と考えています。

統計学会は学会賞の極めて少ない学会です。海外でもよく知られている著名な統計学者の多くが、これまでに何の受賞もありません。私たちの年代はよいとしても、若い方々が大学等に就職す

るときは他分野の人と競争になります。他分野であれば受賞する十分な価値ある研究成果を挙げているのに、統計学会に所属していることで、何の賞も得られないことは問題です。優れた研究成果を挙げた方は、学会で積極的に評価すべきであると考えています。統計学は様々な分野に分かれています。それぞれの分野で、最優秀の論文が会員によって発表されたときに授与する、その年度の「最優秀論文賞」新設の骨子が評議員会で承認されました。この具体化は時間切れで新執行部にお願いをいたしました。

その他にもいろいろとありますが、長くなりますので省略いたします。多くのことが進められましたのは、理事長、会長と4年間学会に深くかわることができたからであると思っています。大学でも大学院理工学研究科長として4年目を迎えますが、4年目にして教育・研究組織に大きなインパクトを与える、データ科学専攻を含む5つのセカンダリー・コースを開設する等の教育改革を行うことができました。1期2年限りという会長の任期は短く、統計学会も2期4年を認めてよい時期に来ているように考えています。

日本統計学会は仕事をしていて楽しく、明るい良い雰囲気学会でした。会員の方々の視野も広く、すべてにおいて前向きの学会です。藤越新会長のもとで、新しい視点で学会が益々発展するものと私は確信しています。

3 研究報告の募集

大会企画担当理事
岩崎 学、柴田里程、倉田博史

日本統計学会第71回大会は、2002年同様、応用統計学会および日本計量生物学会との連合大会として9月2日（火）～9月5日（金）の4日間に渡り、愛知県名古屋市の名城大学（天白キャンパス）にて開催されます。研究報告をご希望の方は、「ホームページからの申し込み」、「電子メールに

よる申し込み」、「郵送による申し込み」のいずれかでお申し込みください（詳細は本会報に同封の「統計関連学会連合大会での講演募集のお知らせ」参照）。なるべくホームページからお申し込みください。

○セッションの種類

2003年度大会では、「一般講演セッション」、「コンペセッション」、「企画セッション」の3種類のセッションを設けます。通常の研究報告は「一般講演セッション」にお申し込みください。「コンペセッション」は研究歴の浅い会員中心のセッションです（下記参照）。「企画セッション」としては別記のセッションが企画されています。企画セッションでの講演希望の方はオーガナイザーにご連絡ください。

講演申込締切日：2003年6月20日（金）24時

○研究報告集・報告要旨

報告申し込みをされた方は、下記締切日までに報告集の原稿を連合大会企画委員会宛ご郵送ください。なお本年は、これまで別にお書きいただいていた「報告要旨」の提出をやめ、報告申し込み時の「要旨」を「報告要旨」として学会誌に掲載します。

報告集原稿締切日：2003年7月18日（金）必着

○コンペセッション

研究歴の浅い会員中心のセッションで、研究内容のみならず、発表の仕方も含め評価します。奮ってご応募ください。

- ・発表資格：研究活動を開始して5年程度までの会員（大学院生や博士号取得後2年以内の方も含む）
- ・応募方法：一般講演と同じ要領でコンペセッション希望と明記の上ご応募ください。
- ・授賞：
 - ・2003年度統計関連学会連合大会最優秀発表賞 1名（賞状と副賞3万円）
 - ・2003年度統計関連学会連合大会優秀発表賞 2名（賞状と副賞1万円）
- ・審査：セッションへの出席者の無記名投票による。

○特別講演

次の特別講演が予定されています。

- （a）藤越康祝（広島大・理）日本統計学会会長
- （b）John B. Copas（University of Warwick）
- （c）Walter Lehmacher（Universität zu Köln）、Reinhard Eisebitt（ClinResearch）

○企画セッション（テーマとオーガナイザー）

- （1）統計学とマーケティング

照井伸彦（東北大・経済）TEL 022-217-6311,
terui@econ.tohoku.ac.jp

- （2）統計学と保険

大森裕浩（東大・経済）TEL 03-5841-5516,
omori@e.u-tokyo.ac.jp

国友直人（東大・経済）TEL 03-5841-5614,
kunitomo@e.u-tokyo.ac.jp

- （3）MCMCを利用した応用計量分析

和合 肇（名古屋大・経済）TEL 052-789-2378,
wago@ism.ac.jp

- （4）買物動向調査の活用 商業活性に向けて

福井幸男（関西学院大・商）TEL 0798-54-6366,
fukuji@kwansei.ac.jp

- （5）多重比較法研究の最近の動向

広津千尋（明星大・理工）TEL 042-591-7142,
hirotsu@ge.meisei-u.ac.jp

鎌倉稔成（中央大・理工）TEL 03-3817-1934,
kamakura@indsys.chuo-u.ac.jp

- （6）SNPデータの解析における統計的諸問題

松浦正明（（財）癌研究会・癌研究所）
TEL 03-5961-8383, mmatsuura@jfc.or.jp

江口真透（統計数理研究所）TEL 03-5421-8728,
eguchi@ism.ac.jp

- （7）DNAアレイデータ解析に関する統計的諸問題

樋口知之（統計数理研究所）
TEL & FAX 03-5421-8749, higuchi@ism.ac.jp

井元清哉（東大・医科学研究所）
TEL 03-5449-5615, imoto@ims.u-tokyo.ac.jp

- （8）シグモイド型用量反応関連の問題

高橋行雄（中外製薬）TEL 03-3273-0826,
takahashiyo@chugai-pharm.co.jp

- （9）QOL測定尺度研究部会の最終討論

丸山久美子（聖学院大・人文）

TEL 048-780-1869,

k_maruyama@seigakuin-univ.ac.jp

(10) ネットベースの統計環境の利用と応用

森 裕一（岡山理科大・総合情報）

TEL & FAX 086-256-9652, mori@soci.ous.ac.jp

(11) データとその属性情報の記述

柴田里程（慶応義塾大・理工）

TEL 045-566-1654,

shibata@math.keio.ac.jp

(12) 高次元データ解析の理論と応用

若木宏文（広島大・理）

TEL & FAX 0824-24-7359,

wakaki@math.sci.hiroshima-u.ac.jp

(13) 統計教育（高校、大学、社会人教育の問題
点と他組織との連携について）

村上征勝（統計数理研究所）TEL 03-5421-8766,

murakami@ism.ac.jp

渡辺美智子（東洋大・経済）TEL 03-3945-7411,

michiko@hakusrv.toyo.ac.jp

重要なアドレス一覧

連合大会講演申し込みページURL:

<http://www.jss.gr.jp/meeting/2003/entry/>

電子メールによる申し込みのためのフォーマット

取得アドレス: m_form@jss.gr.jp

電子メールによる申し込み先アドレス:

m_sub@jss.gr.jp

各種照会のアドレス: m_quest@jss.gr.jp

返信メール不着の連絡: m_trouble@jss.gr.jp

報告集原稿送付先:

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

統計数理研究所内

統計関連学会連合大会企画委員会

4 チュートリアルセミナーと市民講演会

大会企画担当理事

岩崎 学, 柴田里程, 倉田博史

2003年度大会では、2002年度大会に引き続きチュートリアルセミナーと市民講演会を以下の要領で開催します。

1. チュートリアルセミナー

チュートリアルセミナーを実施します。予約制としますが、申し込み方法の詳細は次号会報にてお知らせします。

・期日: 2003年9月2日(火) 13:30-16:30

(下記2テーマを並行開催)

・会場: 名城大学天白キャンパス(愛知県名古屋市)

・テーマ:

(1) 官庁統計の理論と実際

オーガナイザー: 美添泰人(青山学院大学)

講師: 加納 悟(一橋大学), 川崎 茂(総務省), 田辺孝二(経済産業省)

(2) 実験研究および観察研究における偏りの調整

オーガナイザー: 岩崎 学(成蹊大学)・渡邊裕之(万有製薬)

講師: 岩崎 学(成蹊大学), 山岡和枝(保健医療科学院), 松山 裕(東京大学)

・内容: (1) の「官庁統計の理論と実際」は、(a) 官庁統計の理論、(b) 官庁統計の実際(その1), (c) 官庁統計の実際(その2)の3部構成の講演に続いてパネル討論を行います。(a) では大規模な調査としての官庁統計を理解するうえに必要な理論的基礎の紹介を行います。その中には調査の設計、標本理論などの他、特にマイクロデータの公開に当たって考慮すべき個人情報保護に関する理論とその応用に関する最近の発展が含まれます。(b) では総務省の主要な統計調査のうちから、家計調査および国勢調査の精度に関する話題

を紹介します。また(c)では経済産業省の作成している企業および事業所関連統計の現状と高度な分析事例を議論します。

(2)では、共変量調整(covariate adjustment)もしくは共分散調整(covariance adjustment)とよばれる手法群について概説します。実験や調査などにおける要因効果の群間比較において、背景因子(共変量)に偏りが見られた場合の調整法です。臨床試験や疫学調査をはじめとする多くの研究分野で必須の手法ですが、これまでまとまった議論が必ずしも十分でなかったことから今回取り上げました。共分散分析、「処置前-処置後」データの解析およびロジスティック回帰について、コンピュータの出力を交え議論します。また、共変量が数多くある場合の傾向スコア(propensity score)による調整法もその初歩から最先端の結果まで紹介します。

2. 市民講演会

・期日:2003年9月2日(火)17:00-19:00

・会場:名城大学天白キャンパス(愛知県名古屋市)

・テーマ:教育と統計

・オーガナイザー:柴田里程(慶應義塾大学)・岩崎学(成蹊大学)

・講師:吉村 功(東京理科大学),馬場国博(慶應義塾湘南藤沢中・高等部),林 篤裕(大学入試センター)

・内容:

コンピュータの普及により統計学の教育環境も大きく様変わりをしつつあります。特に高等学校では、統計はこれまで数学の中の一部としての位置づけでしたが、「情報」の科目も新規に導入され、数学の枠組を超えた新しい展開が予想されます。本講演会では、今後の統計教育のあり方をはじめ、高等学校における先駆的な統計教育の取り組みを紹介します。また、高校生や教師および一般の方々にとって最も身近で興味を持たれている大学入試データの分析を通じて統計の面白さも実感していただきます。

5 2003年度統計関連学会連合大会における保育室設置のお知らせ

統計関連学会連合大会実行委員会

2003年度連合大会では同時開催される日本行動計量学会と合同で保育室を開設いたします。設置期間は学会開催期間中とし場所は会場内の一室の予定です。原則として事前申し込みによる利用といたします。詳細はまだ決まっていますが、決

まり次第、逐次連合大会のホームページに掲載いたします。

子供と一緒に学会に参加したいとお考えの皆様、どうぞご利用下さい。

6 「第8回日本統計学会賞」受賞候補者の推薦募集

第8回日本統計学会賞受賞候補者の推薦募集を下記の選考方法にしたがって行います。書式については、学会事務局にお問い合わせください。第8回受賞候補者の推薦締め切りは2003年6月9日です。推薦書の宛先は学会事務局です。

【推薦方法】受賞対象者の選考は、会員の推薦を受けて、選考委員会が実施する。

1) 受賞の候補者を推薦することができる者は、日本統計学会の正会員、名誉会員に限る。推薦者は所定の書式にしたがって、対象範囲に定められた分野のいずれかに候補者を推薦する。

なお、賞の概要を以下にご紹介します。

【名称】日本統計学会賞

【趣旨】統計学の研究及び普及に対して貢献した個人に対して授与し、その功績を顕彰する。

【対象範囲】受賞の対象となる者は、その年齢、性別、国籍、日本統計学会の会員・非会員の別を問わない。また、対象とする分野は次のとおりとし、全体として年間3名程度に授与する。

*理論統計学の理論の発展に多大な貢献のあった者。

*実証・応用・計算；この分野は以下のような内容を含む。

(1) 人文・社会系では、経済、経営の実証分析、社会学、言語学、心理学の調査・分析など、統計的手法を利用して社会的現象を解明するのに貢献のあった者。

(2) 医学、工学、農学、理学などでは統計的手法の適用による具体的な問題の解決に対する貢献のあった者。

(3) 統計計算では、統計的分析のためのアルゴリズム・ソフトウェアの開発に貢献のあった者。

(4) 応用一般として、分野を問わず統計調査の標本設計、経営管理などで貢献のあった者。その他：理論・実証・応用などを含め、幅広く統計学の普及・発展に貢献した者。

【選考方法】受賞対象者の選考は、会員の推薦を受けて、選考委員会が実施する。

1) 略（(上記推薦方法1)を参照）

2) 選考委員の任期を1年とし、その委員会の構成は以下の通りとする。

日本統計学会会長、前会長、理事長、会誌編集担当理事2名、および会長が推薦し評議員会が承認した者若干名。選考委員会委員長は、日本統計学会会長が務める。

【賞の内容】賞状および記念品などの副賞を授与する。副賞は、原則として「統計学の学会活動60周年記念基金」の果実の範囲とする。

【発表】選考委員会は、その結果を評議員会および学会総会において報告し、大会期間中に授賞式を行う。

7 奥野忠一先生を悼む

吉村 功（東京理科大学）

2002年12月24日、奥野忠一（おくのただかず）先生が他界されました。享年80歳でした。謹んで哀悼の意を表すと共に、先生の業績と人柄を私の知る範囲で紹介させていただきます。

私が奥野先生と初めてお会いしたのは、1961年夏の確率統計グループ（PSG）サマーセミナーだったと思います。私はまだ修士2年生だったのですがそのときに名前と顔を先生に覚えられたようで、翌年春の日本数学会でペンネームの口頭論文発表をしたら、統計数学科会の（統計側）評議員をされていた先生から「この変な名前はどこの誰だろうと思っていたら君か」と言われ、その年に統計数学科会の運営委員に任命されてしまいました。

北川敏男先生と増山元三郎先生が交代で評議員

をされていたのに対し、森本治樹先生などPSGの中心活動家群が日本数学会の若返りと民主化のために奥野先生を評議員に当選させたということもあって、先生は若手の登用に積極的だったのだと思います。当時の奥野先生の若さは、最後の著書「船場の子世界を歩く（2003年、日科技連）」の16ページ（ネルー首相と握手）、35ページ（フィッシャー教授に講義）という写真に現れています。ちなみに、奥野先生の後を継いだ評議員は渋谷政昭先生で32歳くらいでした。

奥野先生の著書では、「多変量解析法」（1971年、日科技連）が工業現場の技術者の方々の間で良く知られています。しかし先生ご自身では、多変量解析より実験計画法の方に愛着があったと思います。私が初めて読んだ先生の著書は芳賀敏郎先生

との共著「実験計画法」(1969年、培風館)でしたし、先生に少しゆとりができた晩年に出された著書は「農業実験計画法小史」(1994年、日科技連)でした。

先生は大学では数学科を卒業されたのですが、就職したのは農林省農業技術研究所で、品種改良のための圃場実験・農業試験に実験計画法を応用することが最も重要な仕事でした。そこで理論だけではなく、現実社会でそれを活用することの意義を深く実感されたものと思われます。

農業技術研究所から東京大学工学部計数工学第4講座の教授に移られ、20歳代の統計家育成の仕事に経験を積み重ねられた後、何かの機会に2人でお酒を飲みながら話をしたことがあるのですが、その折「吉村君どうじゃ、わしのやり方は他の先生と一味違うだろ。大学だと理論の方が高く見られるんじやが、わしは応用がないとあかんと思っとるんじや」というようなことを言われていました。「応用」が先生を表すキーワードの一つであることは、先生の仕事を知っている方なら誰でも認めることだと思います。

先生が東京大学を定年退官され、東京理科大学にいられたのは1983年でした。世間常識で言うところの定年退官というのは、「これからは悠々自適で過ごして下さい」というメッセージの筈でした。しかし理科大にいらっしゃってからの先生は、これからが仕事をする時期だ、といわんばかりのご活躍でした。

まず1984年に事務局長として第12回国際計量生物学会の開催を成功させました。3年後の1987年には実行委員長として国際統計協会第47回会議を開催しました。この間、1985年から88年3月まで、東京理科大学工学部長を務められ、さらに学校法人東京理科大学の理事を拝命され、経営学部を創設する活動を始められました。1993年の経営学部発足には、先生の御努力が大きく寄与しており、

結果として経営学部の初代学部長に就任されました。

「理科大学に文系学部を作るのはおかしい。大学名から理科を外せと文部省が言うものだからな、じゃあ理科を外して東京大学にしますと言ってやったよ」というのは、先生らしいジョークだったと思います。東京大学から来られた先生だから言えたのかもしれませんが。

このようなマネージメント的なことばかりではありません。われわれ統計学関係者を驚嘆させたのは、先生が日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会などの学術大会、あるいはその上部組織の国際大会等、学術的な集まりに頻繁に顔を出され、しばしば深い経験に裏付けられた厳しいコメントを出されたことでした。いくつになっても、視力などに多少の不自由があっても、研究や討論に参加できるということを、先生は身をもって示されました。私達後進の者にとってすばらしい模範だったと思います。

私が先生のことを考えるときのキーワードはもう一つあります。それは「人」です。先生は、生涯を通して、人を見ては適材適所を考えられ、その視点を通して人を育てられました。人脈を豊に持ち、ある時は人を立て、あるときは御神輿として人に立てられ、人と人との共同作業を稔り豊かなものとされました。そのどの場面でも先生の振る舞いは実に巧みでした。極め付きは奥野千恵子夫人との2人3脚であったと私は感じています。

語ればつきることがありませんが、統計学関連の他の学会誌には他の方の思い出が述べられていますので、私はこれで一区切りします。著書リストや略歴等については、上に引用した著書を参照して下さい。

末筆ですが、心からご冥福を祈りたいと思います。

8 工藤昭夫先生を偲んで

坂田年男（九州芸術工科大学芸術工学部）

日本統計学会名誉会員であり、九州大学名誉教授である工藤昭夫先生は、2003年2月3日、中華人民共和国吉林省長春市にて享年74歳でご逝去されました。

工藤昭夫先生は昭和26年東京大学理学部数学科を卒業された後、九州大学助手、同講師、同助教授を経られ、昭和42年九州大学理学部教授に就任され、九州大学統計数学講座を担当なされ、平成3年御定年退官なされるまで、九州大学統計数学講座の発展につくされ、同年5月には九州大学名誉教授の称号を授与されました。同年より平成6年まで東海大学開発工学部教授を勤められ、平成6年からは兵庫女子短期大学へ移られ兵庫大学開設にご尽力され、平成7年から兵庫大学経済情報学科教授を勤められ、平成14年同大学を御退官されました。さらに、休むまもなく、東北師範大学から招聘を受けてご遊学中の突然のご逝去でした。

先生は数理統計学において主に3つの大きな分野で世界的なお仕事をされました。インド統計研究所に客員研究員として滞在中に考案されたという外れ値の検定法の研究、世界で初めて先生が考案された近交係数の計算法の研究、アイオワ州立大学に客員準教授として滞在中に開発された多変量片側検定論の研究です。いずれも世界的に有名なテキストに掲載され、数多く引用されている先駆的なお仕事として世界的に高い評価を受けています。先生は「お弁当を食べながら普段着の姿で」やすやすとこれらの成果を挙げられていくのでした。今でもセミナー中のことを思い出します。「さあどこまでできた？話してごらん」とおっしゃりながら、やおやお弁当を開けられて（ご多忙でセミナー時間がしばしば先生の昼食時間となりました）、「ふん、ふん、ふーん」とか「すごいね！」、「本当？（このときは少し眼鏡を下げられ

て、上目づかいにこの言葉を発せられました）」とかおっしゃりながら聞いておられたことが昨日のこのように思い出されます。先生のご研究の、単に数学的難しさを追っかけるのではなく「意味のあることを自然にする」というスタイルが、常に人の先を行く世界に先駆的なお仕事に結実していったことは、先生に御指導を受けた研究者としていつも心に戒めとして思っていることであります。先生はこういう風にして多くの優秀な統計学者の方々を世に送り出され、そのお仕事は連綿と大河のごとく後世に続いています。とくに留学生の方には本当に親切に指導をされ、母国に帰ってからは学長へなられた方が3名にもおよび、偉くなられた後にもいつまでも「工藤先生」、「工藤先生」と慕われているのはひとえに先生のご人徳のなせる業といえましょう。先生のその世界的な業績にもかかわらず、あの低い物腰は先生が「敬虔なクリスチャン」であったことと関係しているのかもしれませんが。先生が怒られたことはついぞ見たことがありません。先生は多くの国際学会（国際生物学会、国際統計協会、国際数学会会議等）で主催者や運営委員や座長を務められ、さまざまな学会（日本数学会、日本統計学会、日本人類遺伝学会等）では評議員を務められ、九州大学においても評議員等を務められ、学会活動や社会的に名誉ある活動に奔走されておりましたが、一方で、先生は大阪のカトリック関係の養護施設で長年監事を務められ社会奉仕活動にもご熱心であったと奥様より伺い、敬服の念を一層強くした次第です。中国から時々、「昔書いたあの論文送ってください」、「この人の論文送って欲しいのだけど、この人誰？」と、つい年末まで何回かメールのやり取りをさせていただいていたので、突然の訃報の電話に「まさか！」と未だに信じられない思いです。先生のあの優しい物言いがもはや聞けない

かと思うと残念でなりません。しかし、先生の声は今でも耳に残っています。先生の薫育を受けられた皆様も多分同じ思いではないかと思います。先生の示された道を標にこれからの統計学を発展

させていくことが、先生のご恩に報いる唯一のすべと信じて研究に邁進したいと思います。先生、どうぞ安らかに眠りください。

9 統計教育部会（分科会）*のご案内

統計教育部会（分科会）長
村上 征勝

日本の統計教育には問題が山積しております。今のところ、大きな問題が報告されていないのは、小学校における教育だけといえます。中学校に関しては、残念なことに今回の学習指導要領の改訂で統計資料の整理に関する事項はなくなりました。高等学校の新指導要領では、数学基礎の中の「身近な統計」と数学Aの中の「場合の数と確率」、数学Bの中の「統計とコンピューター」、数学Cの中の「確率分布」で一応確率と統計のことが学べるようにはなっています。しかし、数学基礎は選択必須、数学B・Cは4項目の分野から内容を選択して履修することになっているため、実際に高校で数学基礎、及び数学Bの中の「統計とコンピューター」、数学Cの中の「確率分布」を学習する生徒は全体の数パーセントではないかと言われています。大学での統計教育は、統計学科が皆無であると言う教育体制の不備が原因で、統計教育や統計の教育者、専門家の育成に支障をきたしております。また、社会人に対する教育はその多くが少数の民間のセミナーや企業内での教育に依存しているという状況です。

このように、日本における統計教育は大変憂うべき状況にあるといえます。しかしながら、今日のようなデータが社会に溢れているという現状において、その処理分析のための統計学のニーズは高く、どの分野の企業も統計の知識を有する人材を必要としているという調査報告があります。このような状況の中で統計教育をどのように進める

べきか、また現状を改善するためには今何ができるのか、何をなすべきかを議論する場として、また統計教育に関する研究成果を発表する場として、統計教育部会（分科会）の設置を考えました。

幸いなことに昨年11月の評議会において、統計教育部会（分科会）の設置が認められました。この部会（分科会）は統計教育の普及・発展に貢献することを目的としており、具体的には次のような活動を考えております。

1. 小・中・高校・大学における統計教育、あるいは社会人等を対象とする統計教育の実践、ならびに研究に関する研究会の開催
2. 各種統計教育の実践、ならびに研究のための作業グループ、臨時プロジェクト等の活動
3. 統計教育に関する他の学会、諸団体との共同プロジェクトの実施
4. その他分科会の目的を達成するための適切な作業

そこで統計教育に関心のある会員の方々の参加をお願いする次第です。なお、この部会（分科会）への参加は統計学会会員に限定しておりません。小・中・高校等の先生方や社会人の方にも広く声をかけていただければ幸いです。

*本会は日本統計学会の分科会の一つとして設置されましたが、名称は統計教育部会を用います。

10 シリーズ：統計学の現状と今後

魅力ある商品創りに向けたこれからの品質経営

——先進企業の品質経営技術向上活動を例として——

天坂格郎（青山学院大学理工学部）

1. 顧客を科学化する“カスタマーサイエンス”

これからのもの造りは、「顧客が欲しくなる前に欲しいものを提供する」ということが特に重要になる。そのためには、もやもやとした顧客の気持ちをきちんと把握することが肝要である。それを具現化するのが、“カスタマーサイエンス”であり、これは魅力ある商品創りに欠かせない“ウォンツ”創出のビジネスプロセスを意図している。顧客の言葉（暗黙知）のイメージやコンセプトを共通言語（言語知）で表し、さらに技術の言葉（設計図面など）に相関技術を用いて適切に変換（明白知化）することが大切になる。これは主観の客観化を意味している。

顧客は現在の商品に対して良い悪いといった評価をしているが、将来どんな物が欲しいかは具体的にイメージしていないことが多い。一般に、“カスタマーサイエンス”では、顧客は要求を言葉で表現するが、商品のデザイナー（企画、設計者ら）はその言葉を咀嚼し、適確な図面を起こさなければならない。

それ故に、顧客に一番近い営業・サービスの担当者は、数字で客観的にものを言う研究開発や設計、次の商品開発をするプランナーに顧客のイメージを伝える場合、暗黙的な言葉に頼らずにもっと科学的に共通言語で表現することが大事である。

何故顧客がこの商品を喜ぶのか或いは文句を言うのか、その表現の根底には何があるのか、それでは、次にどういう物を提供しなければいけないか、或いは具体的にどういう状況になった時に不具合が出るか、などを“カスタマーサイエンス”の方法論でアプローチすれば共通言語に落とし込みができ、さらに技術の言葉に変換できる。設計

や開発担当者は、相関技術でそれを数値化して研究室や実験室でシミュレートして、どういう条件の時に起きるか確認することが可能になる。そして、これらの仕事が適切になっているかを確認するために、今度は図面化されたものが顧客の要求するものを具体化できているか、相関技術で同様に客観の主観化することが大切である。

今日、日本や世界の中で元気なメーカーは、顧客の気持ちを少しでもつかむために暗黙知を明白知化し、さらに一旦図面化したものをこれでいいかどうかフィードバックし、客観を主観化するということを常に謙虚にやるという姿勢が原点にあることが伺える。これらの考え方は、シューハート博士やデミング博士らがSQC（統計的品質管理）を日本に紹介し、戦後の日本のもの造りや品質経営技術の発展に貢献したことにも通じるものである。

2. 品質管理の要諦をなす、新しいSQC活用の勧め

ー先進企業“トヨタ”における品質経営技術の向上活動ー

事業1年ー財務3年ー人創り10年と比喩されるように、筆者は中長期の品質経営強化の視点から、知的生産性の高い実務家を育成し、新たな品質経営技術の確立を図るため、全社的SQC推進活動をプロモートし、以下の3フェーズで展開した。

1. 問題解決能力の向上、“SQCルネサンス”運動

21世紀のもの造りを予見し、まず第1フェーズとして、実務家の仕事の質を向上させるための全社活動、「トヨタのSQCルネサンス」を1988から体系的・組織的に推進し、トヨタグループにも同様に展開を進めた。

ここでは、「SQC推進サイクル」（実施ー成果ー

教育－人材育成）を提唱し、1万5千名の実務家（スタッフ）を対象に、技術・生産技術・製造の各部門からまず実施した。この推進展開の特徴は、SQC教育から始まるこれまでのやり方を改め、実施から始まるSQC推進サイクルにして、固有技術を伸ばす“生きたSQC活用”ができるようにした。SQC教育は階層的（基礎－初級－中級－上級－最上級の5階層）に整備し、年間1000名を超える教育体制とした。これまでのSQC手法単位の講義やデータ解析偏重の教育から脱却し、問題解決のビジネスプロセスに沿うように教育カリキュラムを構成した。ここでは、SQC手法を仕事の局面で適切に組み合わせ活用できる“SQCテクニカルメソッド（SQC活用のステップ、N7、SQC基礎、信頼性解析－多変量解析－実験計画法）を考案し、科学的アプローチでSQC活用が展開できるようにした。特に多変量解析は、輻輳する要因解析とモデル化に効果的に寄与し、実験計画法との併用で問題解決をより実効性の高いものにした。

SQC推進サイクルを効果的なものにするため、階層別SQC教育の上級・最上級の修了生をSQC専門スタッフとして資格化し、10年計画で1000名（250部＊4課ノ部）のSQC指導者の育成の必要を捉え、各職場での技術問題の解決指導やSQC教育の講師として力量を高めるシステムを確立したことで、全社的SQC推進の継続的展開の駆動力となり得た。その推進態様と成果は、日経メカニカル「トヨタのSQCルネサンス」（1994）で紹介もしている。

II. ビジネスプロセスの質変革，“サイエンスSQC”の展開

次に第2フェーズとして、これらの活動がさらに発展し、“カスタマーサイエンス”を実現させる実証科学的方法論として、“品質管理原論「サイエンスSQC」”⁽¹⁾を提唱した。特徴は、技術問題のメカニズムの科学的解明（可視化など）である。“SQCルネサンス”で培ったSQCテクニカルメソッドを援用する科学的アプローチに加え、これまでのSQC活用による問題解決の成果を積み重ね、技術の伝承・発展に寄与できるよう、全社で

共有活用する知的ネットワークシステム“TTIS”（Total SQC Technical Intelligence System）を構築した。

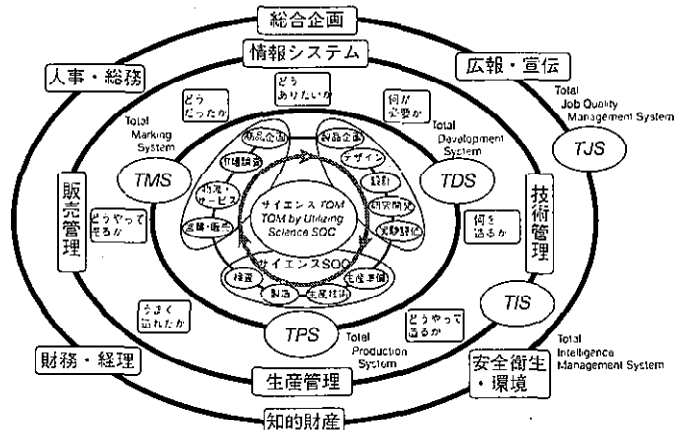
加えて、部次・課長級が率先垂範し、中長期の課題解決に取り組む重要性を捉え、“マネジメントSQC”を推進展開した。

具体的には、SQC推進サイクルをさらに強化するため、新たに5000名の管理者全員を対象に、階層別教育に“部課長SQCセミナー”を新たに設けた。これにより、品質マネジメント力の強化が可能となり、“サイエンスSQC”の展開はトヨタ・トヨタグループの“経営的視点でのTQM手法”として浸透し、体系的・組織的に仕事の質向上に大きく貢献した⁽⁴⁾。

III. 次世代型品質経営技術の確立，“サイエンスTQM”の新展開

最近、品質の概念も製品品質の志向から、ビジネスプロセスの質、さらには企業経営の質へと拡大してきている。それ故に、カスタマーオリエンテッドな魅力ある商品を創出するためには、技術開発・設計、生産技術・製造、営業・販売、そしてこれら3部門を有機的に連鎖させる管理部門、及び全部門の人を活かし組織を活性化させる役割の事務・間接部門が、経営技術に係わる各部門のミッションを捉え、それぞれ仕事の質向上が図れるよう中核（コア）技術を確立し、それらが体系的・組織的に連携させることが大切である。そのために、1997年からは第3フェーズとして、図に示す“品質経営の新原理「サイエンスTQM」”を提唱し、次世代型品質経営技術の確立に寄与するよう、TQM活動を戦略化させる取り組みを進めた。各部門がコア技術を具備し相互に連携し合えるよう、5つのコア－原理：TMS（Total Marketing System）、TDS（Total Development System）、TPS（Total Production System）、TIS（Total Intelligence Management System）、TJS（Total Job Quality Management System）を確立し、“サイエンスSQC”で全部門をリンケージ化するのがねらいである。

図中の第1の原理“TDS”は情報を共有化し技



“サイエンス” TQMの体系図

術の進化に呼応した最新技術の創出と最適化設計である。第2の原理“TPS”は、顧客志向・従業員重視・科学的工程管理であり、スキルが高まる労働作業環境の実現にある。第3の原理“TMS”は既成に囚われない科学的営業販売による顧客に信頼される品質経営の実現である。第4の原理“TIS”は企業活動の中核であり、図中に示した円環サイクルの外輪に位置する事務・管理部門と連携し、内輪の開発設計・生産・販売の各部門をマネジメントするために、人・技術・物を知的情報を活用もしてジャストインタイム化する機能を有している。さらに第5の原理“TJS”は社内外環境の変容を捉えグローバルマーケティングを強化させるため、人材の育成と社内外とのパートナーリングにより知的生産性を高める機能を有している。提唱できた“サイエンスTQM”は、「オールトヨタのTQM-S活動」として適用され現在に至っている。

推進展開の特徴のもう1つは、役員級が統括者として率先する戦略的品質経営の布石をなす“トータルタスクマネジメントチーム”活動がある。経営技術に係わる最重要課題を設定し、系列・非系列の仕入先メーカーとのパートナーリングを全社レベルで取り組む、戦略的品質経営活動である。例として、世界的な技術問題として未解明であった、“ブレーキ制動品質”（曙ブレーキ、アイシン）や“トランスアクスルのオイルシール密封性能”（NOK）に関する故障メカニズムの解明（可視化）

を行ったことで、大きな品質改善成果が得られ、“サイエンスTQM”の有効性が検証されている。また、“カスタマーサイエンス”を実践する科学的な営業販売方法として、“トヨタセールスマーケティングシステム”を構築し、さらに“チラシ広告効果”の定量的把握を行い、効果的なチラシ広告のデザインや配布方法の研究実践し、人事・労務・施設環境らの各部門は、高齢化・女子化に備えた、労働作業環境の改革プログラム“AWD6/J”（Aging & Work Development 6Project）を進め、生産技術・製造の各部門と“トータルタスクマネジメントチーム”活動を編成し、①意欲・意識②疲労③体力④道具・装置⑤温熱環境⑥疾病防止の側面から科学的アプローチで、自動車組み立てショッパの生産現場の加齢化対応を試み所与の成果を得ており、国内外の生産向上に鋭意展開が進められている。

【参考文献】

- [1] K. Amasaka, (2002), “Proposal and Implementation of the “Science SQC”, Quality Control Principle”, *International Journal of Computer Modeling*, (decided to be published)
- [2] 天坂ほか, (2000), サイエンスSQC-ビジネスプロセスの質変革, 日本規格協会.
- [3] K. Amasaka, (2002), “Science TQM, A New Principle for Quality Management”, *Proc. 2nd Euro-Japan Workshop on Stochastic Risk Modeling, Insurance, Production and Reliability, France*, 1-10.

11 統計教育委員会からのお知らせ

——平成15年度から実施される高等学校・数学の新指導要領に基づく
統計関連項目の変更点とセンター入試に対する取り組み——

統計教育委員会

平成15年4月入学時の生徒から対象となる高等学校の新指導要領・数学において、確率と統計の関連で、以下の点が改訂になっております。

今回の改訂は、大学入試センターが実施するセンター入試の出題範囲にも統計が深く関わってゐることを意味する点で、大学で統計関連科目を教育する教員にも重要な問題と思われまゐります。

数学に関するセンター入試の対象は、現在、以下のようになっています。

数学Ⅰ、数学A、数学Ⅱ、数学B

具体的には、「数学Ⅰ」、「数学Ⅰ・A」の2つから1つを選択する試験時間、「数学Ⅱ」、「数学Ⅱ・B」の2つから1つを選択する試験時間が設置されています。「数学Ⅰ・A」は、「数学Ⅰ」と「数学A」を一緒にしたもので、「数学A」の項目“数と式”は必修、残り3項目は選択で1つを選ぶようになっています。「数学Ⅱ・B」は、「数学Ⅱ」と「数学B」を一緒にしたもので、「数学B」の4項目の全てが出題され、そのうちの2項目を選択するようになっています。

この流れから、改訂後の対象範囲は、

数学基礎、数学Ⅰ、数学A、数学Ⅱ、数学B
となります。

中間答申には、既に、「数学基礎」と「数学Ⅰ」を合併した形の出題が提案されており、日本数学会は機関誌“数学”においてこの件に対する反対声明を公表しております。また、「過年度生（いわゆる浪人）に対しては、配慮する。」があります。

新課程になって、選択項目がある科目は、センター入試の対象範囲と予想される上の5科目中では、「数学B」だけです。

現在のような出題をするとすれば、「数学Ⅱ・

B」という形にまとめられ、「数学B」の4項目の全てが出題され、そのうちの2項目を選択するようになることが予想されます。

センター入試の性格からは、様々な受験生に対応することが求められるのは当然であり、この範囲に含まれる項目は、すべて公平に、選択項目として出題されると考えられます。

統計に関連するものは具体的に、数学基礎の「身近な統計」と数学Bの「統計とコンピュータ」です。上記の項目を実際に、高等学校の教育の中で定着・普及させていくためには、高等学校における統計項目の指導事例書や適切な入試問題の作成実績が必要になります。

統計学会関連の諸先生方には、是非、この視点からのご協力をお願いいたします。

また、この件に関する文科省への提言やご意見をお持ちの先生は、統計教育委員会用メールアドレス education@jss.gr.jp までご連絡いただければ幸いです。

改訂前

改訂後

(H15年4月入学生より対象)

数学Ⅰ（4単位）

数学基礎（2単位）

二次関数

数学と人間の活動

図形と計量

社会生活における

数理的考察

個数の処理

*身近な統計

確率

数学Ⅰ（3単位）

方程式と不等式

二次関数

図形と計量

数学A（2単位）	数学A（2単位）
数と式	平面図形
平面幾何	集合と論理
数列	場合の数と確率
計算とコンピュータ	
数学Ⅱ（3単位）	数学Ⅱ（4単位）
いろいろな関数	式と証明・高次方程式
図形と方程式	図形と方程式
関数の値の変化	いろいろな関数
微分・積分の考え	
数学B（2単位）	数学B（2単位）
ベクトル	数列
複素数と複素数平面	ベクトル
確率分布	***統計とコンピュータ
算法とコンピュータ	数値計算とコンピュータ
数学Ⅲ（3単位）	数学Ⅲ（3単位）
関数と極限	極限
微分法	微分法
積分法	積分法
数学C（2単位）	数学C（2単位）
行列と線形計算	行列とその応用
いろいろな曲線	式と曲線
数値計算	***確率分布
統計処理	***統計処理

以下は、文部省告示「高等学校学習指導要領」

平成11年3月 より抜粋

※「身近な統計」（数学基礎）

目的に応じて資料を収集し、それを表やグラフなどを用いて整理するとともに、資料の傾向を代表値を用いてとらえるなど、統計の考えを理解し、それを活用できるようにする。

ア 資料の整理、イ 資料の傾向の把握

***「統計とコンピュータ」（数学B）

統計についての基本的な概念を理解し、身近な資料を表計算用のソフトウェアなどを利用して整理・分析し、資料の傾向を的確にとらえることができるようにする。ア 資料の整理（度数分布表、相関図）、イ 資料の分析（代表値、分散、標準偏差、相関係数）

****「確率分布」（数学C）

確率の計算及び確率変数とその分布についての理解を深め、不確定な事象を数学的に考察する能力を伸ばすとともに、それらを活用できるようにする。ア 確率の計算、イ 確率分布（確率変数と確率分布、二項分布、条件つき確率、平均、分散、標準偏差）

****「統計処理」

連続的な確率分布や統計的な推測について理解し、統計的な見方や考え方を豊かにするとともに、それらを統計的な推測に活用できるようにする。ア 正規分布（連続型確率変数、正規分布）イ 統計的な推測の考え（母集団と標本、統計的推測の考え）

各項目の詳細は、「高等学校学習指導要領解説－数学編、理数編－」平成11年 文部省（実教出版）を参照ください。

12 2002・2003年度評議員会議事録抄録

2002・2003年度第2回評議員会議事録抄録

日時：平成14年11月9日（土）13：30～15：50

場所：統計数理研究所会議室

出席者：会長：杉山高一 理事長：国友直人

評議員：氏家勝巳、大戸隆信、鎌倉稔成、北川源

四郎、栗原考次、西郷 浩、柴田里程、清水邦夫、杉浦成昭、瀬尾 隆、田村義保、寺崎康博、富澤貞男、西井龍映、浜砂敬郎、樋口知之、広津千尋、福井武弘、藤井光昭、藤澤洋徳、舟岡史雄、牧野都治、南美穂子、宮岡悦良、柳川 堯、若本宏文、

渡辺則生，渡辺美智子

委任状：9名

****報告事項****

<議題1>理事会からの報告

国友理事長より理事会からの報告があった。

〔新理事会の構成〕新理事会の構成に関して資料に基づき説明があり，情報幹事・HP幹事の設置，広報委員会および広報幹事を設ける案などを検討中との報告があった。また，理事会の開催日程の説明があった。

〔会誌〕欧文誌：前編集長を中心とした国際化路線を踏襲し，電子ジャーナル化をさらに促進する計画であり，年2回の発刊予定であることが説明された。国際化・電子ジャーナル化に伴い投稿数が増加している所以对策を検討中であることも説明された。

和文誌：現在は年1回の発刊予定であるが，将来的には年2回程度の発刊を目指したいことと，依頼原稿・応用特集などを考慮中との説明があった。

なお，編集委員会からの要望事項として，指導中の院生による適当な論文の投稿を評議員も促進して欲しいとの要望があった。編集委員会では院生等については特にレフェリー期間の短縮などを検討する予定とのことであった。

〔学会連合関係〕

1. 「横断型基幹科学技術研究団体連合」への参加を理事会決定し，竹村渉外担当理事を担当とした。
2. 「経済学会連合」の担当者を和合理事と加納理事に変更した。

〔科学研究費〕科学研究費の分類上の変化（統計科学の細目化），現状の科学研究費配分方式の問題点に鑑み，赤平渉外担当理事，竹村渉外担当理事がメール・会報で対策を呼びかけたこと，今後の対策も渉外担当理事を中心に検討することが報告された。

〔会誌への補助金申請〕学術定期刊行物に対する補助金（研究公開促進費）の申請を，今年度より

欧文誌のみに対して行うこととした。また，申請には掲載論文の他の国際的有力雑誌における引用状況が重要になることから，今後，ISI（Institute for Scientific Information）への登録努力をする必要があることが報告された。

〔連合大会に関して〕9月に行われた本年度の3学会連合大会の際に連合大会・連絡委員会が開催された際，次期連絡委員会委員長に広津千尋氏（明星大学）を推薦したこと，新連絡委員会の第一回会合は10月26日（土）に開催され，次年度は，実行委員会・大会企画委員会・事務局チームを設置することについて報告があった。

〔その他〕学会費遅延者に対する会費納入の働きかけ，新会員の勧誘などの協力が要請された。また，学生会員から正会員への移行の手続きを怠っている人がいるので，手続きをするよう働きかけた方がよいとの意見が出された。

<議題2>学会賞会計報告

杉山会長より配布資料に基づき学会賞の会計報告が行われた。

<議題3>研究部会の終了報告と中間報告

杉山会長より，資料に基づき「統計分野におけるインターネットの活用（森裕一主査）」，非線形時系列解析と金融工学II（谷口正信主査）」の2件の終了報告と「QOL測定尺度の研究（丸山久美子主査）」，「電子社会における統計教育のあり方に関する研究（村上征勝主査）」の2件の中間報告が説明された。

<議題4>その他

1. 「横断型基幹科学技術研究団体連合」に出席していた北川評議員より，資料に基づき同連合が学術会議に積極的に働きかけている科学技術政策提言に関する説明があった。
2. 杉山会長より，資料に基づき統計教育委員会の活動報告がされた。

****審議事項****

<議題1>研究部会の新設

杉山会長より、資料に基づき研究部会「多重比較とその関連分野の総合的研究（鎌倉稔成主査）」の新設申請の説明があり、2年間の期間で承認された。

<議題2>研究分科会規定第1項の改定について
杉山会長より、資料に基づき研究分科会規定第1項の改定について説明があり承認された。

<議題3>研究分科会設置申請の承認について
杉山会長より、資料に基づき「統計教育分科会」、「計量経済・計量ファイナンス分科会」と「統計シミュレーション研究分科会」の3件の設置申請の説明があり承認された。

<議題4>監事の選任について
国友理事長より、監事を寺崎康博氏と垂水共之氏に委嘱したいとの説明があり承認された。

<議題5>賞（Year Best Paper Award等）の新設について
杉山会長より、資料に基づき日本統計学会最優秀論文賞、日本統計学会Best Presentation賞（ともに仮称）の新設に関して説明があった。柴田氏（企画担当理事）より、本年度の連合大会で特定のセッションに参加した発表に対し聴衆の投票による審査で賞を与えるという企画を考えており、対象はこれから職を得たいという研究者であるとの説明があった。また、企業の名前を賞に付けることはやめた方がよいとの意見が出された。審議の結果、日本統計学会最優秀論文賞は新設を承認され、Best Presentation賞は、連合大会で連合学会として賞を出すことも含めて理事会で検討することを承認された。

<議題6>ロゴマークの新設

杉山会長より、日本統計学会のロゴマークを会報で賞金を付けて公募したいとの案が出され承認された。公募の際に日本統計学会のビジョンを示すものを載せて欲しいという意見や学会の英語名も載せて欲しいという意見が出された。

<議題7>除名者の承認

会費滞納者に対し会費を納入するように働きかけて、できるだけ円満退会となるようにするという事で、今回は除名者としなかったこととした。除名の取り扱いに関しては今後理事会で議論することとした。

<議題8>事典の刊行に関して

杉山会長より、資料に基づき朝倉書店からの「統計の事典」の刊行企画案の説明があった。刊行するかどうかは今後検討することとした。

<議題9>学術会議会員候補者

国友理事長より、先日おこなわれた選挙の結果、学術会議会員候補者として、経済統計学は松田芳郎会員、統計学は柳川堯会員、吉村功会員、情報学は佐和隆光会員を推薦するとの説明があった。この問題について、制度が変わり会員推薦の依頼が来ない可能性があるとの指摘があった。確認の上、対処することとした。

<議題10>会長選挙

会長選挙に際し、選挙立会人として和合氏に依頼することが承認された。杉山会長より3名が会長候補者として推薦されている旨説明があった。その後投票により、藤越康祝氏が過半数を獲得し、次期会長候補として選出された。

13 2002・2003年度理事会議事録

2002・2003年度第3回理事会議事録

日時：2002年12月21日（土）12：20～16：00

場所：統計数理研究所 特別会議室

出席者：杉山高一会長、国友直人理事長、久保川達也、加納悟、岩崎学、倉田博史、柴田里程、和合盛、山口和範、宿久洋、竹村彰通、瀬尾隆、藤澤洋徳、南美穂子

<議題1>理事長からの報告

前回の理事会以降の活動に関して国友理事長より以下の報告があった。

- *10月26日の第2回理事会後、統計関連学会連絡委員会が開催され、実行委員会、企画委員会、事務局チームを組織することとし、実行委員会は和合氏、企画委員会は岩崎氏を責任者とするなどが決まった。
- *11月9日に評議員会が開催され（評議員会議事録案参照）、この時点で統計学会から推薦する学術会議会員候補者を決めた。
- *11月19日に日本統計学会拡大企画委員会、11月22日に第1回連合大会実行委員会が開催された。
- *次期会長候補としては会員より3人が推薦され（資料参照）、さらに11月9日の評議員会での投票の結果、広島大学の藤越康祝氏を次期会長候補者として決まった。その後、郵送による会員の投票の結果、圧倒的多数により信任されたので、藤越康祝氏が次期会長になることが決定した。
- *学術会議会員の選挙は、これまで3年に一回行われており、従来どおりのルールに従い経済統計学は松田芳郎会員、統計学は柳川堯会員、吉村功会員、情報学は佐和隆光会員を統計学会が推薦する候補者とした（評議員会議事録案参照）。ところが、学術会議の会員を決める推薦管理委員会・事務局より各学会が行っている手続きを延期して欲しいとの連絡があった（資料

参照）。その為とあえず全会員による選挙は中止し、その旨をホームページで報告することにした。今後の状況の展開の中で学会として十分に検討する余裕がない場合には、理事長と会長が相談して対処することとした。

<議題2>各理事からの報告

[会誌：欧文] 久保川担当理事より、資料に基づき幾つかの事項に関して報告があった。編集委員のリストを改訂した。編集を引き継いだ時点での30本も含めて現在までに36本の投稿があり、採択されたものが1本、審査中が17本、それ以外は今回発刊号に載るか不採用となった。審査報告が長い間たっても届かないものもあり、再度催促しても審査報告がない場合には、レフェリーが一人であっても編集責任者の判断で審査結果を出すこととした。現在は掲載論文の内容がやや理論中心なので、もう少し応用的論文の投稿を促進したい。また、論文はPDFファイル形式でも投稿できるようにしたい。統計関連のリンクに載せてもらおうと投稿が増加するのではと期待している。との報告があった。

国友理事長より、論文の英語表現の添削を予算化してあるので、投稿者にとりメリットがあることを強調できるのではとの意見、雑誌編集への貢献に感謝するために査読者名リストを掲載したり、編集協力への賞を出したりしてはどうかという意見が出された。

[会誌：和文] 加納担当理事より、10月に3本それ以降4本で現在までに計7本の投稿があり1本は採択されたこと、査読は2ヶ月で依頼しており、採択できない場合は改訂し別の雑誌に掲載できるようにできるだけ丁寧なコメントを返してもらうようにしていること、6月まで様子を見て場合によっては新企画を考えたい等の報告があった。雑誌の発行回数を年2回にすることに関して意見が出され、今後検討していくこととした。

〔広報〕山口担当理事より、会報No.113で2点間違いがありホームページに会報訂正を載せNo.114でも訂正とお詫びを出すこと、現在No.114の編集作業中で1月のなるべく早い時期に会員に届くように発行したいことの報告があった。また、統計学会ロゴ・マーク募集に関して資料に基づき説明があった。会員以外からの応募も可とし、締め切りは4月末をめどにする、賞金は最優秀賞5万円、優秀賞1万円（2点まで）とし、最優秀作品決定後、プロに若干の修正を依頼することとした。締め切り、発表日付、審査等に関する詳細は、瀬尾理事が担当することにした。

〔大会・大会企画〕和合担当理事より、連合大会は名城大学で開催する予定であり、実行委員会は名古屋地区を中心とした約10名のメンバーと3学会の庶務担当により構成すること、関係者によれば建物の設備は十分であること、等の報告があった。欠席した赤平渉外担当理事より、メールにより2004年度の候補地としては現在2件の申し出があるとの報告があった。

岩崎大会企画担当理事より、資料に基づき報告があった。11月19日に日本統計学会拡大企画委員会が行われ統計学会総会は12:30から1:30とする案を検討した。12月16日に第一回連合大会企画委員会が行われ、大会参加の申込み先は連合大会企画委員会とし、WEBによる申し込みを第一選択とするが、会員の便宜も考え郵送での申し込みも受け付けること、チュートリアル・市民講演会を行うこと、新企画（コンペ、賞の授与、他）を考慮中であること等の報告があった。

〔渉外〕竹村担当理事より、韓国統計学会との国際交流の一環として企画している統計学会員によ

る韓国統計学会誌の割引購読の申込みがまだ少ないので、理事会のメンバーを含め購入を推進したいとの要請があった。

＜議題3＞学会誌のJ-STAGE上での公開について

瀬尾理事より、資料に基づき、J-STAGEとその上で学会誌を公開することに関して説明があった。今後も継続して検討することとし、瀬尾理事が担当することになった。

＜議題4＞統計学会ホームページの変更案

宿久担当理事より、資料に基づき、ホームページの変更案の説明があった。会報は最新号以外の号の全部をPDFで掲載することにした。また、理事会の項目をなくし、「大会」と「賛助会員」のメニューを加えることにした。

＜議題5＞研究分科会の予算について

杉山会長より、研究分科会の予算は通信費として年間2万円とする案が出され承認された。

＜議題6＞退会の承認

11名と賛助法人1件の退会が承認された。

＜議題7＞その他

日本統計学会最優秀論文賞の企画は瀬尾理事が担当することにした。

会長として最後の理事会にあたり、杉山会長より挨拶があった。

14 公募情報

14.1 徳島大学総合科学部 数理科学教員募集

- 1 所属 総合科学部・自然システム学科・数理科学講座
- 2 専門分野 統計学またはORなどの応用数学

- 情報統計学、統計解析、計画数学などの分野
- 3 担当授業科目 学部専門科目の授業（確率・統計、モデリング理論など）および全学

共通教育の統計学、情報リテラシー関連授業など。ただし、大学院担当になった場合は、数理科学基礎論Ⅰ・Ⅱ、応用数理特論、同演習

4 職種 助教授又は講師

5 募集人員 1名

6 任用予定日 平成15年10月1日

7 任期 7年(再任可)

8 応募資格

- (1) 任用時において博士の学位を有する者
- (2) 任用時において、35歳位までの者

9 提出書類

- (1) 履歴書(写真貼付)
- (2) 研究業績リスト
- (3) これまでの研究概要と着任後の研究計画(約2,000字)
- (4) 研究論文(別刷りまたはその写し)、その他研究業績のうち主要なもの
- (5) 教育業績書(教育機関におけるティーチングアシスタントも含めた担当授業科目・内容・期間、教育機関以外での社会教育活動

実績)

(6) 大学教員としての教育についての抱負(約1,000字)

(7) 推薦書または参考意見を伺える方の氏名・所属・問い合わせ先

10 応募期限 平成15年5月16日(金) 17時(必着)

11 選考方法 書類審査の他、面接、講演会等をおこなうことがあります。

12 応募書類の提出先

〒770-8506 徳島市常三島町2丁目1番地
徳島大学総務部人事科常三島事務室宛

※郵送の場合は、必ず「書留」にし、封筒の表に「数理科学教員応募」と朱書きすること。

13 応募、その他任期制給与等に関する問い合わせ先

徳島大学総務部人事科第一任用係

jnniny1k@jim.tokushima-u.ac.jp

TEL: 088-656-8601

FAX: 088-656-7019

14.2 財団法人放射線影響研究所統計部研究員公募

1 職種: 統計部研究員 若干名

2 研究内容

本人の興味に基づく統計的研究、および疫学者、生物学者および臨床医との共同研究で、特に放射線の人体に対する健康影響の研究。具体的な作業内容は研究計画の策定、データ解析、報告書の作成および結果の口頭発表。

3 応募資格

- a. 応用統計、特に生物統計における研究に経験と強い興味があること。
- b. 数理統計または生物統計の博士の学位、またはそれと同等の経験があること。
- c. 次の分野における一つ以上の経験があること: リスク推定またはハザード関数モデリング、経時的臨床データ解析、疫学研究の計画と解析(ネステッド対照-症例研究、遺伝

子環境交互作用)、生物情報学

d. ある程度の英会話能力があること。

4 提出書類

- a. 履歴書(電子メールアドレスを記入すること)
- b. 職歴および研究業績
- c. 研究に対する抱負と目標(A4で1ページ程度)
- d. 主要論文別刷り(5編以内)

5 応募期間

採用が決定するまで

6 応募開始

2003年4月から

7 問い合わせ先

〒732-0815 広島市南区比治山公園5-2

財団法人 放射線影響研究所

統計部部長 Dale Preston

Tel : 082-264-7219

Fax : 082-262-9768

E-mail : preston@rerf.or.jp

〒732-0815

広島市南区比治山公園5-2

財団法人 放射線影響研究所

統計部 澁川律子

8 書類提出先

14.3 新生府立大学（仮称）数理工学分野教授公募

- 1 公募職種 教授 1名
- 2 所属講座 数理解析講座（大講座）
- 3 専門分野 数理統計学
- 4 担当講義 工学部共通科目と学部及び大学院の専門科目の講義
- 5 着任時期 平成17年4月1日
- 6 応募資格 博士の学位を有し、平成17年4月1日の時点で満55歳以下で、大学院博士課程（前期・後期）を担当できる方
- 7 提出書類
 - （1）履歴書（写真添付）
 - （2）研究業績リスト（著書，原著論文，国際会議論文に分けて記載のこと）
 - （3）主要論文の別刷（コピー可） ただし1998年以後の論文別刷はすべて提出のこと（各1部）
 - （4）現在までの研究概要（1,500字以内）
 - （5）今後の研究・教育に対する抱負と展望（1,500字以内）
 - （6）本人についての参考意見を伺える方2名の氏名，所属，連絡先
 - （7）研究代表者として受け入れた科学研究費などの外部資金のリスト

※提出書類はA4版とし、各書類に氏名を記入して下さい。

- 8 公募締切 平成15年6月2日（月）必着
- 9 書類送付先 〒599-8531 堺市学園町1-1
大阪府立大学大学院工学研究科電気・情報系専攻
数理工学分野主任 原 惟行 宛
（封筒表に「数理工学分野教授応募書類在中」と朱書きし、書留にて送付下さい）
- 10 問い合わせ先 同上
TEL : 072-254-9358,
E-mail : hara@ms.osakafu-u.ac.jp
- 11 その他
 - 1）必要に応じて面接を行うことがあります。
 - 2）適任者がいない場合には、決定を留保することがあります。
 - 3）選考結果は平成15年10月末までに連絡の予定。
 - 4）提出書類は、後日返却します。
 - 5）新生府立大学（仮称）は、発足と同時に、大阪府が直接運営に関わる大学から、新生府立大学法人（仮称）が運営する大学に移行（法人化）する見込みです。従ってこの公募職種の採用は、現在法制化が準備されている法人制度の枠組みのもとでの採用となる見込みであることを御承知おき下さい。

15 会合案内

* 会合案内

2003年5月

- * 5.22－23：日本計算機統計学会第17回大会
朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター）

<http://www.nuis.ac.jp/jscs17/index.htm>

2003年7月

- * 7.7－10：INTERNATIONAL MEETING OF THE
PSYCHOMETRIC SOCIETY (IMPS-2003)

Chia Laguna (CAGLIARI), ITALY

<http://www.imps2003.unina.it/>

*7.27—30: The 7th World Multiconference on Systemics, Cybernetics and Informatics

Orlando, Florida, USA

<http://www.iiisci.org/sci2003/>

2003年8月

*8.3—7: The Joint Statistical Meetings 2003

San Francisco, California, USA

<http://www.amstat.org/meetings/jsm/2003/>

*8.13—20: The 54th ISI (International Statistical

Institute) Session

Berlin, Germany

<http://www.isi-2003.de/>

サテライトミーティングも多数計画されています。詳しくは上記ホームページをご覧ください。

2003年9月

*9.2—5: 2003年度統計関連学会連合大会

名城大学天白キャンパス

*9.3—5: 日本行動計量学会第31回大会

名城大学天白キャンパス

<http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/bsj2003/>

16 修士論文・博士論文の紹介

修士論文・博士論文の紹介を、(1) 氏名、(2) 学位名、(3) 取得大学名、(4) 論文タイトル、(5) 主査名、の順で記載します。

修士論文

(1) 児玉和寛 (2) 修士 (数理学) (3) 九州大学大学院数理学府数理学専攻 (4) 多変量時系列の正規性と線形性について (5) 柳川堯

(1) 小林洋介 (2) 修士 (数理学) (3) 九州大学大学院数理学府数理学専攻 (4) グラフィカルモデリングにおける共分散選択について (5) 柳川堯

(1) 長友望朗 (2) 修士 (数理学) (3) 九州大学大学院数理学府数理学専攻 (4) 二次元二値反応データの潜在構造モデルによる因果グラフ推定 (5) 柳川堯

(1) 三根智央 (2) 修士 (数理学) (3) 九州大学大学院数理学府数理学専攻 (4) グラフィカルモデリング: 患者対照研究への応用と相関行列の構成 (5) 柳川堯

(1) 大迫健史 (2) 修士 (数理学) (3) 九州大学大学院数理学府数理学専攻 (4) 生存時間分析と非線形比例ハザードモデル (5) 小西貞則

(1) 河島鉄郎 (2) 修士 (数理学) (3) 九州大学大学院数理学府数理学専攻 (4) 混合正規分布に基づく独立因子分析とコンポーネント数の推定 (5) 小西貞則

(1) 西田朋由 (2) 修士 (数理学) (3) 九州大学大学院数理学府数理学専攻 (4) 動径基底関数ネットワークに基づく多変量非線形回帰モデル (5) 小西貞則

(1) 長久武 (2) 修士 (数理学) (3) 九州大学大学院数理学府数理学専攻 (4) 繰り返し測定値における同時信頼区間 (5) 百武弘登

(1) 吉田尚史 (2) 修士 (数理学) (3) 九州大学大学院数理学府数理学専攻 (4) 逆回帰における信頼領域の性質の検証 (5) 百武弘登

(1) 湯川智仁 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Proportional reduction in variation measure for two-way contingency tables with ordered categories (5) 富澤貞男

(1) 加藤義行 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Measure of diagonals-parameter symmetry and decomposition of measure of sub-symmetry for square contingency tables with ordered categories (5) 富澤貞男

(1) 山根俊介 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Power-divergence-type measure of departure from diagonals-parameter symmetry for square contingency tables with ordered categories (5) 富澤貞男

(1) 池野潤一 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Odds-ratio distance measures of departure

from two row effects models for two-way contingency tables (5) 富澤貞男

(1) 保谷英哉 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Generalization of Cramer's coefficient of association for contingency tables (5) 富澤貞男

(1) 船戸亮 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Conditional difference asymmetry model for square contingency tables with nominal categories (5) 富澤貞男

(1) 大野学 (2) 修士 (社会学) (3) 立教大学社会学研究科 (4) 大規模データにおける効率的変数選択手法の開発 (5) 山口和範

(1) 高橋淳一 (2) 修士 (社会学) (3) 立教大学社会学研究科 (4) 多変量データにおけるモデルフリーな予測手法とその応用 (5) 山口和範

(1) 中山厚穂 (2) 修士 (社会学) (3) 立教大学社会学研究科 (4) Three-way Data Analysis Model in Multidimensional Scaling (5) 山口和範

(1) 堀田真一 (2) 修士 (農学) (3) 東京大学大学院農学生命科学研究科 (4) 多次元尺度法を利用した住宅庭園景観のパターンと認識の研究 (5)

岸野洋久

(1) 岡本直也 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学大学院理学研究科 (4) Pairwise multiple comparisons of mean vectors under the elliptical populations with unequal sample sizes (5) 瀬尾隆

(1) 富田真理子 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学大学院理学研究科 (4) On the conservative simultaneous confidence intervals for multiple comparisons among mean vectors (5) 瀬尾隆

博士論文

(1) 戸田光一郎 (2) 博士 (理学) (3) 鹿児島大学理工学研究科 (4) 推定可能な母数に付随する統計量 (5) 大和元

(1) 米本孝二 (2) 博士 (数理学) (3) 九州大学大学院数理学府数理学専攻 (4) Autoregressive approach for chaotic data (5) 柳川 堯

(1) 中道礼一郎 (2) 博士 (農学) (3) 東京大学大学院農学生命科学研究科 (4) 不完全マーカーに基づく自殖性・他殖性生物のQTL解析手法の開発 (5) 岸野洋久

17 事務局から

投稿のお願いとお知らせ

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。新刊やソフトウェアの紹介、会合の案内なども歓迎いたします。

来日統計学者の紹介につきましては、訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお寄せ下さい。さらに、求人案内 (教員公募) などを受け付けております。また、修士論文・博士論文の紹介を行います。(1) 氏名、(2) 学位名、(3) 取得大学名、(4) 論文タイトル、(5) 主査名 (指導教員)、(6) 連絡先 (e-mailアドレス) をお送り下さい。

できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル (テキスト形式) の送付をお願い致します。

原稿送付先

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

立教大学社会学部産業関係学科 山口和範宛

Tel: 03-3985-2325 (ダイヤルイン)

Fax: 03-3985-2833

E-mail: kaiho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用e-mailアドレス)

訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

木村清郎会員 (2003年1月19日)

工藤昭夫名誉会員 (2003年2月3日)

退会者

庄田安豊, 田端和彦

現在の会員数 (2003年 4 月 1 日現在)

名誉会員	24名
正会員	1334名
学生会員	186名
総計	1544名
賛助会員	19法人
団体会員	2団体

・ 日本統計学会ホームページURL:

<http://www.jss.gr.jp>

・ 住所変更連絡用e-mailアドレス:

jusho@jss.gr.jp

・ 広報連絡用e-mailアドレス:

kaiho@jss.gr.jp

・ その他連絡用e-mailアドレス:

jimu@jss.gr.jp

統計・コンピュータ分野 非常勤スタッフ募集

統計ソフトウェア S-PLUS 関連業務の拡大につき、株式会社 数理システムでは統計学およびコンピュータに関する知識と意欲を持ったスタッフを募集しております。ご関心のある方はぜひ一度ご連絡ください。(能力・経験に応じた条件・待遇を設定します。応募の秘密厳守、S 言語の利用経験のある方歓迎します。)

(業務内容) 能力を生かせる、様々な業務があります。

- ・ 統計関連英文翻訳、各種技術文書作成、製品サポート、その他能力に応じて。
- ・ 遠隔地での在宅勤務、アルバイトも可能です。ご相談ください。
- ・ 常勤の正規スタッフも随時募集しております。詳しくはホームページをご覧ください。

株式会社 数理システム S-PLUS グループ(会社案内はホームページをご覧ください)

TEL.03-3358-6681 FAX.03-3358-1727

(URL) <http://www.msi.co.jp/> e-mail: splus-misc@msi.co.jp